

この国をまたも閉じさせてはならない

——「開いて、閉じて」を繰り返してきた日本の歴史——

日 高 六 郎

以下は、七月八日、東京・一ツ橋の如水会館で開かれた日高六郎さんの米寿をお祝いし、新著『戦争の中で考えたこと』（筑摩書房刊）の出版を記念する会での、日高さんの記念講演の全文です。あとで、日高さんが、若干の加筆、訂正などをされたものを掲載いたします。当日は一八〇人ほどの方が参加され、大盛況でした。

今日は、私の「米寿」と「出版」の祝いを、ということ、私の敬愛する知人・友人が集まってくださいました。貴重な時間をわざわざ割いてご出席くださった方がたに、ほんとうに心からお礼を申し上げます。

壱岐の島と青島

私の先祖は、壱岐の島に戦国時代から住みついて、明治維新まで十五代をくらししました。私の父は、一八七五（明治八）年生まれ。父は七七歳で一九五一年に病没しましたが、私は父より長く生きることになりました。

私は一九一七（大正六）年、中華民国青

島（チンタオ）市で生まれました。ご承知の通り、一八九八年、ドイツは清国から九九年間の約束で青島を租借しました。イギリスが同じ条件で香港を租借したのと同じ年です。ドイツはここに完璧な都市設計のもとに、完全に欧州風の港湾都市をつくりました。

一九一四年、第一次世界大戦がはじまったとき、日本政府は、日英同盟を楯にとつて、青島市を完全に軍事占領しました。

私の父は、東京外国語学校のシナ語科第一期卒業生。卒業後、小森寿太郎公使のもとで北京の日本公使館で働きますが、五年ばかりでやめます。日本政府の対清

外交方針に疑問を持ったらしい。その後、天津で小さな貿易商會をひらきました。しかし病氣のため、日本帰國を考えていたとき、日本軍の青島占領がおこる。青島を見に行ったところ、その街の美しさ、氣候の温和さにひきつけられ、青島に移りました。

そして、四男として、私が生まれました。多分、小学校一年生のとき、祖父八



八歳の米寿の祝いが壱岐でありました。私は父母につれられて、壱岐へ行きまして「日本」の土地を踏みました。

玄海の孤



島、岬は美しい島でした。しかし、青島とくらべると、全体として貧しい農村でした。人情は優しく、とくに私たち兄弟は、八八歳の祖父にかわいがられました。

貧しい日本が無理をして五大強国に

私自身は、その後も青島で暮らし、小学校、中学校をそこで終えて、高校（旧制）へ入る時に初めて上京しました。私の兄が東京の小石川（現在の文京区）に下宿しておりました。そこには水洗便所はありませんでした。でも、青島は、すっかり欧化されていましたから、最初から水洗便所は備わっていました。日本もそういう青島に比べれば、貧しい暮らしだと思えたのです。もちろん、中国人の民衆の暮らしは、くら

べものにならぬほど貧しいものですが、日本が、世界の七大強国、さらには五大強国の一

つに入っていたわけで、あれは相当に無理をしたに違いない。無理をしない限り、明治から始まって僅かの間に、そんな位置につけるわけがないからです。私も無理をして高校に入り、大学にも入りました。

こうして私は、東京と青島とを往復する暮らしをすることになりました。私の思い出の半ばは中国にあります。一九三一年、「満州事変」が始まったとき、私は中学三年生でした。

一昨年暮、久しぶりにフランスから日本に帰って、ある小さな集いで話をしたときのことですが、会が終わって帰るエレベーターの中で、ある参加者が「日高さんの話もいけれど、満州事変にさかのぼるのたいへんだ……」と実感をこめて言われたそうです。たまたま、暢子（日高夫人）が後ろで聞いていたんですね（笑い）。しかし、今日も実は「満州事変」からお話したい（笑い）。

八八歳の私は、事変がはじまったとき、中学三年生でした。

反戦新聞でもあった家庭新聞『暁』

今日、みなさんにさし上げた私の新著は、小さな本ではありますが、その最初は、弟、八郎が小学校の五年生のときにつくり始めた家庭新聞『暁』のことから

始まっています。執筆者は、父と母、私の兄、その次の兄、私、そして編集長の八郎の六人、読者もその六人でした。実は、今日、その家庭新聞『暁』の一枚、「第五年、九一号」とあるものを持って来ました。これをみなさんにお返しします。この新聞はA4版で、一九三一年に創刊し、三五年に九四号で廃刊になりました。お返しする号には「理性と武力」という題の、中学一年の八郎君が書いた「社説」が載っています。つたないものではありますが、二・二六事件批判の文章です。元来は文芸新聞として考えられ、家族全員で書いていたものですが、同時に反戦新聞でもあったのです。

私の家庭は、とても楽しく、みな仲のいいものでした。「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである」という言葉があります。トルストイ『アンナ・カレーニナ』の冒頭ですね。本当に楽しい家庭でした。ただ、その家庭の中で出されていた新聞は反戦でした。四号目だったか五号目だけに、初めて反戦の短歌を書いたのが父でした。尾崎行雄が『改造』一九三三年の号に書いた満州事変批判の文を読んで感動した父が詠んだ短歌です。「満州国」が出来たとき、東京では祝賀のために花電車（注1）が出ました。それを知った父は、こういう短歌をつくっ

たのです。「彼岸会（ひがんえ）に都の空は雪と聞く 民ののぼせを冷やす神業」うまいですねえ。（笑い）ほんとにうまい。

こういう短歌が載る新聞ですから、これは学校に持ってゆけないんです。友だちにも読まずことは出来ません。一九三五年までは続けていたんですが、その年の夏休みに私が東京から青島に帰ってきたとき、もうそろそろやめたほうがいいなあ、ということになりました。青島でこれが作られ、東京の兄に送られる。兄は読んだあと、また青島に送り返す。それが続いていたんですが、ちよつと大きな目立つ封筒で郵送される。いつ検閲で開けられるかわからない、もうやめたほうがいいな、という判断になったのです。楽しい家族の生活ではありませんが、そういう時代をこの家族は通り抜けていたのです。厳しい時代でした。「満州国」建設を、その時代にあつてかなり批判的に見ていた人びとはほとんど亡くなり、僕はその最後の一人に近いということにもなりそうです。

そこにおられるギャバン・マコーマック先生、どうぞ。（マコーマック氏、起立して挨拶。拍手）今、マコーマック先生は国際基督教大学の教授をされていますが、一九九九年に、「国民文化会議」の集会で話をされたとき、「一九九九年は一九三

一年と相当に似てますね」とおっしゃった。僕はかなり頭がいいですね、ちゃんと覚えているんですよ（笑い）。マコーマック先生は覚えていらつしやいますか（笑い）。しかし、この一九九九年が一九三一年に似ているということは、ただごとではありません。国歌・国旗法ができ、緊急事態法ができたのはこの年でした。

第二の開国、第三の開国

丸山眞男さんが「開国」といういい文章を書かれています。キリシタン・パテレンによるものが第一の開国として、明治の維新は第二の開国と言っています。そして昭和の敗戦が第三の開国とされます。一つさかのぼって古代の中国との交流を加えれば、全部で四つの開国となります。丸山さんは、その最後の「昭和の開国」のところで、こう書かれています。

それは封建社会から明治社会に移ったときの感想で、「無数の閉じた社会の障壁をとりはらったところに生まれたダイナミックな諸要素をまさに天皇制国家という一つの閉じた社会的集合的なエネルギーに切りかえて行つたところに『万邦無比』の日本帝国が形成される歴史的秘密があつた」（丸山眞男「開国」 岩波書店『丸山眞男集』第八巻85ページ）と。つまり封建

時代にあつた無数の障壁から人びとが解放されて、新しい開いたエネルギーが解放されたところに明治維新があつた、だが、その終局は、集合的エネルギーとして一つの国家が成立し、それが大日本帝国となつて、やがて、戦争、そして敗戦というところに行き着くことになる。丸山さんはそのことを書いている。

明治の始まりを、開いた社会への移行ととらえた。その通りですね。明治維新で日本は開いてゆくことになりました。しかし、それが最終的には閉じた絶対的天皇制、超国家主義的天皇制国家になつてゆく。しかし、こうして閉じた日本は、昭和の開国、敗戦によってまた開いた。この開いた国家がどうなるか、それはわれわれ国民一人一人の自由なる意思の決定によつてつくられてゆくものだ……これがいつも丸山さんが繰返されるご意見でした。

一九三一年と重なる一九九九年

しかし、私が考えて見ますと、一九九九年が一九三一年だとするならば、明治の開国が閉じていったごとく、昭和の開国も、まもなく閉じた国家へと転換してゆくことになるのではないか、あるいは、かなり前の時期から閉じる傾向は開始されてきたのではないか、と思われるので

す。

明治の開国が閉じてゆくのは、国会開設、教育勅語発布の時期以来からです。

そしてその閉じた形が極限的に現れてきたのが、一九一〇年の日韓併合と大逆事件（注2）です。その閉じた社会は、第一次世界大戦以後の大正デモクラシーの時代に、少し開くことになりました。ですが、その直前に、日本国は大変なことをしました。それは一九一五年の「対支二一カ条要求」（注3）なのです。明治の開国のひとつの終点が、第一次大戦の中で青島占領、「対支二一カ条要求」となるのですが、しかし、世界全体が非常に国際主義的になりつつありましたから、日本でも、それに乗って、労働組合もできれば市民運動も始まる、議会政治も活発になる、とくに忘れることのできないのは、西光万吉の部落解放宣言です。あれは大正デモクラシーの象徴の一つでした。そのように、大正期に少し開いたのですけれども、その後、「満州事変」以後、また閉じてゆくでしょう。そして遂に敗戦にまで行きます。

この敗戦により、日本国憲法も生まれ、この国は開いてゆくことになりました。その開いたことが、戦後の日本の、ある意味では、さまざまな形での活気のある活動が展開されてゆく一つの土台になってゆくわけです。労働運動も活発に起こり

ますし、市民運動も生まれます。まさに開いた時代がきたわけです。

しかしながら、一九七〇年ごろから、労働運動が衰退し、学生運動が姿を消し、その他その他、この国はずーっと閉じた方向をたどりだします。大きく考えてみますと、この国は、開いて閉じて、開いて閉じて、開いて閉じて、を繰り返してきました。私は、発展段階論もいと思えますけれども、ただ発展段階論は、少し時間が長すぎるんですよ。一人の人間では、二つの段階を経験することは容易ではありません。福沢諭吉のような人は、封建時代と明治時代の二つの段階を経験できましたがね。（このとき、司会者から紙がわたされる）あ、そろそろ終わりですか？（笑い）

九九パーセントの一致は異常

とにかく、私は、この国が今、閉じて行きつつあるということを実感します。ここのところフランスに長くいて、時々日本に帰りますが、この十五年、あるいは十年、あるいはこの五年、帰るたびにそれを痛感します。二〇〇〇年でしたか、二〇〇一年でしたかに帰国したとき、新聞に、全国の小学、中学、高校で、日の丸掲揚、国歌斉唱を实行了した学校が九九パーセント、と出ていました。九九パーセントという数字は、全体主義国家でも

ないと、なかなか出来ない。かつて投票率九九パーセントという国もありましたが、これは容易なことでは実現できません。相当な無理が必要です。私はこの報道を見て、「あーあ」と思いました。そして、今年帰ってきて今度はテレビに驚きました。中国の教科書にある対日批判についての報道でした。

僕が小学校六年のとき、山東出兵などがあり、中国の教科書は一斉に反日的になります。反日運動もおこります。しかし、なぜ、反日感情が中国の中に広がり、排斥運動も起こったのか、それはもう、ここにいる皆さまには申し上げる必要もないでしょう。しかし中国での対日批判教科書は、かつても発行されたことがあり、それは日本の武力進出にともなって出てきたものなのです。

今の中国の教科書には問題点もあるかもしれませんが。しかしその問題点も、二〇〇五年の日本の現状と切り離せるものではないのです。かつて蒋介石時代の反日運動に、日本政府は直ちにこういう声明を出しました。「ボウレイシナヲヨウチヨウセヨ」、若い方で、これ書ける人何人いますかね（笑い）。「暴戻支那を膺懲せよ」です。中国では対日批判の教科書を出す、こちらでは「暴戻中国を膺懲せよ」というようなことになる、開いたものが閉じてゆく、それが東アジアに蔓

延してゆく。

東アジアで二度と戦争のないように

私が八八歳になって望むことは、ただ一つだけです。東アジアで二度と戦争がないように！ それだけです。「対支二一カ条要求」は一九一五年でした。あと一〇年でその一〇〇周年が来ます。日韓併合は一九一〇年ですから、あと五年でその一〇〇周年が来ます。一〇〇年もたつて、日本とごく近い大陸の国々にとの間で、政府間の関係だけでなく、国民感情として、中国は嫌だ、韓国は嫌だ、北朝鮮は嫌だ、日本は嫌だ、という風潮がまた強くなってきたのでは、私は死んでも死に切れません。本当に日中が戦火を交えるようなことになるのなら、私はいくら自分の命はいりません。何のために生きてきたのか、ということにもなりません。そういうかなり深刻なことを、私は、日本に帰るたびに感じています。どうすればいいか。それをお話すると、あとまた三〇分はかかりますから(笑い)。なかなかいい考えもあるんですよ(笑い、拍手)。ですから、それは、ここにいらっしゃる「九条の会」のメンバーの加藤周一さんに伝達してから、フランスに帰ることにします。

ほかのところでも私は申し上げていますが、いわゆる靖国問題も、憲法改悪問

題も、決して国内問題ではありません。国際問題です。靖国問題であれだけ強い対日批判をする国ぐにが、九条を改悪するとなったら、どんなに強い衝撃を受け、反応を示すか、想像以上のものがあるうと覚悟しなければなりません。われわれは、そういう、昭和の開国のどん詰まりのところ立っています。

しかし、私は絶望してはおりません。私は、必ずこの国はまた開くと思っています。そう希望しています。今度の本に続く次の本では、どうすれば、この閉じつつある現在の国を、また開くようにさせられるか、それについての若干の提案も書いてみたいと思っています。でも、こういう仕事をしてみると、八八歳になつたということを実感しますね。へとへとになりました(笑い)。これで終わり

いたします。(拍手)

(ひだか・ろくろう、社会学者、本会員)

(注1) 祝い事などのため、花や電気で飾った路面電車。戦前、各都市でよく走らされた。

(注2) 一九一〇(明治四三)年社会主義者、無政府主義者に対する弾圧事件。数百名を檢舉、明治天皇暗殺未遂の名目で二六名を大逆罪として起訴、幸徳秋水ら二四名に死刑宣告。

(注3) 第一次大戦中、一九一五(大正四年)に日本が中国に強要した権益拡大要求。最後通牒により山東省・南満州と東部内蒙古、漢冶萍(かんやひよう)公司などに関する利権、中国の港湾・島嶼の不割譲に関する条約を結ばせた。

(編集部)

Information

8月の広島と長崎の行事

広島では8月5日(金)から7日(日)まで、また長崎では8月1日(月)から12日(金)まで、連日のようにさまざまな行事が予定されています。詳細については、広島での行動は「8.6ヒロシマ平和へのつどい 2005」(代表:湯浅一郎)へ、長崎の行動は、「19thピースウィーク 2005 実行委員会」へお問い合わせ下さい。

「8.6ヒロシマ平和へのつどい 2005」

事務局:〒733-0022 広島市西区天満町 13-1-709 久野方(電話&FAX:082-297-7145)

Eメール:knaruaki@d6.dion.ne.jp

HP:<http://www.d6.dion.ne.jp/~knaruaki/2005tudoj.htm>

「19th ピースウィーク 2005 実行委員会」

連絡先:長崎市筑後町 2-1 教育文化会館内ネットワーク長崎

電話:095-822-4098

8月15日前後の日程は32ページの

「Information」欄をご覧ください。